

## はじめに

本書は、初版以来、学習・受験の好伴侶はたどりとして高校生諸君に愛用されてきた『要説 徒然草』を全面的に改めたもので、新版の特色は次の諸点である。

- ① 判型・文字の大型化 読みやすくするために、大判（A5判）に改め、文字を大きくした。
- ② 2色刷りの採用 学習上の重要箇所などが視覚的に区別できるようにした。
- ③ 教科書の本文 現在使用されている主要教科書に収録された章段を増補するとともに、必読の文章を網羅するよう努めた。
- ④ 教科書の設問 教科書の研究課題・設問の解答・解法を、「語釈と文法」「文法の要点」「研究」などの欄に、可能な限り収録した。

## 凡例

一、本文は、原則として『日本古典文学大系 方丈記・徒然草』によったが、読みやすくするために、句読点・引用符号・漢字・かなづかいを適宜改めた。またできるだけ多く読みがなをつけて読みやすくするとともに、原文の左向きには、かたかなで読み方を示した。

二、解説は、その章の内容を簡潔にまとめたものであるが、必要に応じて、解釈・鑑賞の手引きとなるようなことからも加えた。

三、**口訳**は原文に即してわかりやすい訳文を作ることにとめた。原文になく訳文に補った箇所には（ ）をつけて明示し、原文と訳文とを比較対照するのに便利なものにした。

四、**読解の要点**には原文を読み解くうえのヒント・手引きになるような語句・語法・文脈上の要点を解説した。古文の実力をつけるには、いきなり訳文を読むのではなく、できるだけ自分の力で考えてみるのがたいせつである。それゆえ、この「読解の要点」を手がかりとして実力を養成されることを切望する。

五、**語釈と文法**は、平易なことばで、しかもできるだけ詳しく説くことを心がけた。抽出した語句には、必要があればまず（ ）の欄内に品詞名を示して、次に語義を説いた。重要語や、一語で多くの意味を持つ語については、そのすべての意味・用法をあげて古文解釈の基礎知識が身につくように心がけた。

六、**文法の要点**では、解釈上むずかしくはなくても、文法的に検討しておかなければならないような語句をとりあげて説明した。特に文法的な基礎事項はなるべくこの欄で扱い、十分な解説を加えることにした。

七、右の五、六の説明にあたっては**文法参照**の指示をして、相互の関連をはかり、できるだけ学習上の便宜をはかるように意を用いた。また、とくに重要で応用範囲が広いと思われる語句は大きな文字にして      で囲みをつけて注意をうながしてある。

八、**研究問題**とその解答を、重要な章に添えた。問題は入試問題中から厳選するとともに、新作問題をも加えたから、これによって各自の実力をテストされたい。

九、付録の「京都付近地図」は、『徒然草』のみならず、他の古典を読む上にもきわめて重要なものなので、これを載せた。また、さし絵もできる限り多くその箇所に入れた。

本書の作成にあたっては、野村 嗣男先生に多大のご尽力をいただきました。

目次

5	目次		
		解 説……………	九
		1 つれづれなるままに……………	一三
		2 いでや、この世に……………	一五
		法師ばかりうらやましからぬものは……………	一八
		人は、かたち・ありさまの……………	二〇
		ありたきことは……………	二三
		3 あだし野の露……………	二五
		4 家居のつきづきしく……………	二九
		後徳大寺大臣の……………	三三
		5 神無月のころ……………	三五
		6 同じ心ならん人と……………	三九
		7 いづくにもあれ……………	四三
		8 人はおのれをつづまやかにし……………	四七
		9 灌仏のころ、祭のころ……………	五一
		七夕祭るこそなまめかしけれ……………	五五
		さて冬枯れのけしきこそ……………	五九
		つごもりの夜いたう暗きに……………	六一
		10 よろづのことは……………	六三
		11 飛鳥川の淵瀬……………	六五
		京極殿・法成寺など見るこそ……………	六七
		12 静かに思へば……………	六九
		13 人の亡きあとばかり……………	七一
		年月へても……………	七三
		思ひいでてしのぶ人……………	七五
		14 雪のおもしろう……………	七九
		15 九月二十日のころ……………	八三
		16 手のわろき人の……………	八七
		17 朝夕へだてなく……………	九一
		18 名利に使はれて……………	九五
		うづもれぬ名をながき世に……………	九九
		ただし、しひて知を求め……………	一〇三

19 ある人、法然上人に……………【第三九段】…………… 六〇

20 五月五日、賀茂のくらべ馬を……………【第四一段】…………… 六二

21 あやしの竹の編戸の……………【第四四段】…………… 六六

御堂の方に法師ども参りたり………………………… 六九

22 公世の二位のせうとに……………【第四五段】…………… 七〇

23 老来たりて……………【第四九段】…………… 七二

24 応長のころ、伊勢の国より……………【第五〇段】…………… 七五

25 亀山殿の御池に……………【第五一段】…………… 七九

26 仁和寺にある法師……………【第五二段】…………… 八一

27 これも仁和寺の法師……………【第五三段】…………… 八四

くすしのもとにさし入りて………………………… 八六

28 家の作りやうは……………【第五五段】…………… 八八

29 久しく隔たりて……………【第五六段】…………… 九一

30 道心あらば、住む所にしも……………【第五八段】…………… 九三

そのうつはもの………………………… 九四

31 大事を思ひ立たん人は……………【第五九段】…………… 九七

32 真乗院に、盛親僧都とて……………【第六〇段】…………… 一〇〇

この僧都、ある法師を見て………………………… 一〇三

33 延政門院いときなく……………【第六二段】…………… 一〇五

34 筑紫に、ながしの押領使など……………【第六八段】…………… 一〇六

35 名を聞くより……………【第七一段】…………… 一〇八

36 世に語り伝ふること……………【第七三段】…………… 一一〇

かつあらはるるをも顧みず………………………… 一一四

ともかくにも………………………… 一一四

37 蟻のごとくに集まりて……………【第七四段】…………… 一一六

38 つれづれわぶる人は……………【第七五段】…………… 一二〇

39 今様のことどもの……………【第七八段】…………… 一二三

40 何事も入りたたぬさましたる……………【第七九段】…………… 一二四

41 法顯三蔵の……………【第八四段】…………… 一二八

42 人の心すなほならねば……………【第八五段】…………… 一三〇

43 下部に酒飲ますことは……………【第八七段】…………… 一三二

44 ある者、小野の道風の書ける……………【第八八段】…………… 一三五

45 奥山に猫またといふもの……………【第八九段】…………… 一三六

46 ある人、弓射ることを……………【第九二段】…………… 一三七

47 牛を売る者あり……………【第九三段】…………… 一三七

またいはく、「されば、人死を………………………… 一七六

48 高野の証空上人……………【第一〇六段】…………… 一七六

49 高名の木のぼり……………【第一〇九段】…………… 一八二

50 双六の上手といひし人に……………【第一一〇段】…………… 一八四

51 友とするにわろきもの……………【第一一七段】…………… 一八六

52 改めて益なきことは……………【第一二七段】…………… 一八七

53 花はさかりに……………【第一三七段】…………… 一八七

よろづのことも始め終はりこそ………………………… 一九〇

よき人は、ひとへに………………………… 一九四

さやうの人の祭見しさま………………………… 一九五

何となく葵かけわたして………………………… 一九六

かの棧敷の前を………………………… 二〇一

54 身死して財残ることは……………【第一四〇段】…………… 二〇五

55 悲田院の堯蓮上人は……………【第一四一段】…………… 二〇七

56 心なしと見ゆる者も……………【第一四二段】…………… 二〇三

世を捨てたる人の………………………… 二〇四

57 御隨身秦の重躬……………【第一四五段】…………… 二〇八

58 能をつかんとする人……………【第一五〇段】…………… 二一九

59 西大寺の静然上人……………【第一五二段】…………… 二二三

60 世に従はん人は……………【第一五五段】…………… 二三四

61 春暮れてのち夏になり………………………… 二三五

一道にたづさはる人……………【第一六七段】…………… 二三七

62 年老いたる人の……………【第一六八段】…………… 二三三

63 さしたることなくて……………【第一七〇段】…………… 二三四

64 相模守時頼の母は……………【第一八四段】…………… 二三八

65 城陸奥守泰盛は……………【第一八五段】…………… 二四一

66 吉田と申す馬乗りの……………【第一八六段】…………… 二四三

67 よろづの道の人……………【第一八七段】…………… 二四五

68 ある者、子を法師になして……………【第一八八段】…………… 二四七

この法師のみにもあらず………………………… 二四九

されば、一生のうち………………………… 二五〇

京に住む人、急ぎて東山に………………………… 二五三

人のおまたありける中にて………………………… 二五三

69 けふはそのことをなさんと……………【第一八九段】…………… 二五八

70 夜に入りて物の映えなし……………【第一九一段】…………… 二六八

71 達人の人を見るまなこは……………【第一九四段】…………… 二六三

72 愚者の中のはぶれだに………………………… 二六五

73 人の田を論ずる者……………【第二〇九段】…………… 二六六

74 平の宣時の朝臣……………【第二五五段】…………… 二六八

後鳥羽院の御時……………【第二六六段】…………… 二七二

75	よき細工は……………	[第二九段]	…二五〇
76	園の別当入道は……………	[第三一段]	…二五五
	おほかた、ふるまひて……………		…二六八
77	よろづのところがあらじと……………	[第三三段]	…二六〇
78	人の物を問ひたるに……………	[第三四段]	…二六二
79	主ある家には……………	[第三五段]	…二六五
80	丹波に出雲といふ所……………	[第三六段]	…二六七
81	八つになりし年……………	[第一四三段]	…二五〇

付録

語句索引……………	…二五三
京都付近地図……………	…三〇一

解説

作者

『徒然草』は兼好法師が書いたものである。兼好は出家前の名を卜部兼好といい、出家後は首読して兼好といった。生没年ははっきりとはわからないが、だいたい弘安六年（二六六）ごろに生まれ、観応三年（二五五）以後のころ、七十歳ぐらいで死んだらしい。父は卜部兼頭といい、兼好はその三男として生まれた。卜部氏は神官で京都の吉田神社の社務職を世襲した家がらなので、後年吉田兼好とも呼ばれた。二十歳ころ堀河家に仕えた後、朝廷に出仕し、官は藏人・左兵衛佐に達したが、三十歳前後に出家して比叡山の横川にこもった。ここを出て後はだいたひ京都に住み、隠者・隠遁者として生涯を送った。晩年は仁和寺近くの双が岡に住んだらしい。『徒然草』のような随筆を書いたほか、歌人としても有名で、頓阿・浄弁・慶運とともに和歌四天王と呼ばれて活躍し、その歌は『続千載集』以下の勅撰集にもはいり、また家集として『兼好法師集』が伝えられている。

成立と諸本

『徒然草』は長い期間にわたって書かれたものを延元三年（二二六）ごろ、兼好が五十歳を過ぎたころに、大部分は自身が編集して今の形にしたものであろうといわれる。このことは各段の連絡から見ても言うことができそうである。書名は最初の段の「つれづれなるままに……」という文からとられた。早くからかなり広く読まれたものらしく、諸種の本が伝わっている。古いものでは永享三年（四三三）に歌僧として有名な正徹がみずから筆写したいわゆる「正徹本」があり、他に流布本として慶長十八年（一六三）刊の、烏丸光広の奥書のある「烏丸本」その他がある。江戸時代になると、一般の人々の常識を養うものとして広く読まれ、註釈書も多く出た。明治以後もこの状態は変わらない。

時代環境

兼好の生きた時代は鎌倉時代の末期で、それはわが国の歴史の上でもとくに目まぐるしい動乱の時代であった。すなわち兼好が生まれたといわれる年は、蒙古襲来という大事件のあった弘安四年からわずか

つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて、  
 心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく  
 書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

**読解の要点** 「書きつくれば」で「已然形+ば」の形に気をつける。「あやしうこそものぐるほしけれ」で、「こそ」の結びに形容詞がくる場合の考えかたをおぼえておく。

**語釈と文法**

**つれづれ** 「徒然」という漢字をあてる。するしごともなく物足りず、たいくつなありさま。名詞としても、形容動詞の語幹としても用いる。

**◆ ままに** ……にまかせて。……によつて。……に従って。「まま」は形式名詞。「に」は格助詞。

**◆ 日ぐらし** — 日じゅう。

1

つれづれなるままに [序段]

**解説** 全巻の序文で、この書物を書いた時の態度や感想を述べたもの。自分ながら変に狂気じみて思われると云っているのは作者の謙遜で、著作などの場合はこういう謙遜の態度をとるのが、昔から今に至るまでの常識である。他の古典にもこうした例は多い。— なおこの「つれづれなる」状態について深く考えた意見が第七五段に見える。

**口訳** する事もなく退屈で心さびしいのにまかせて、  
 一日じゅう硯に向かつて、次から次へと心に浮かんで消えてゆくくだらないことを、とりとめもなく書きつけてみると、《自分ながら》じつに変で、狂気じみているような気がする。

**◆ 心にうつりゆく** — この「うつり」は「移り」ととれば、「それからそれと心に浮かんで来る」という意。「映り」と解する説もあり、それだと「心という鏡に次々に映ってくる」という意になる。前説に従っておく。

**よしなしごと**

は由緒。理由。全部で一語の複合名詞。

「よしなしごと」の三語が合したものの。「よしなきこと」といえば二語である。「よしなしごと」と形容詞の終止形から名詞に続くのは、古い形である。

**◆ そのほか** なく

一語の複合形容詞。作者が自分の著作(あるいは著作の心理)

つまらないこと。くだらななこと。「よし」

どこというあてもなく。とりとめもなく。

を謙遜して言ったもの。

文法の要点

◆「つれづれなるままに」この文節は「書きつくれば」にかかると考えるのが自然であるが、「むかひて」にかかるとする説もある。

◆書きつくれば「已然形+は」の形。この形には三つの用法がある。①順態の確定条件(原因・理由)を表し、「ので」「から」と訳す。②恒時条件を表し、「……するといつも……する」「……とかならず……となる」の意。③前に比して原因結果の関係

が少なく、軽く次へ続けて偶発的事件の前提を表す意、「……すると」「……と」と訳す。ここは③で「書きつけてみると」と訳す。

あやしうこそものぐるほしけれ

「こそ」は強意の係助詞。「じつに」「まことに」などと訳すのが当たる。係り結びを成して下を已然形で結ぶ。「ものぐるほしけれ」は形容詞「ものぐるほし」の已然形。この形を、形容詞「ものぐるほし」に、過去の助動詞「けり」の已然形「けれ」がつ

いたものと見誤る人が多いから注意。だから「狂気じみていた」と訳すのは誤りである。「けり」は連用形接続だから終止形には続かない。なお「あやしうこそものぐるほしけれ」は二つの文節から成る述語で、これに対する主語が省略されている。普通は「自分の心が」「自分が」と考えられているが、「書いたものが」「書きつけることが」「書く態度が」などと考える説もある。「あやしうこそ」は連用修飾語で、「ものぐるほしけれ」を修飾する。

つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしことを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

研究

- 1 兼好は『徒然草』をどんな心持ちで書くと言っているか。
- 2 「あやしうこそものぐるほしけれ」とは、どんな心を述べているか。

解答

- 1 静かでひまな生活を幸いとして、思いのままの筆をふるう心持ち。
- 2 「自分ながらじつに変で、狂気じみていような気がする。」という心を述べていて、自分の著書を謙遜したことはでもある。

2

いでや、この世に

[第1段]

解説 人間として希望するものについて論じたもの。第一節は、身分、家からについて述べ、第二節は高位の僧侶をあげ、第三節に人物こそがたいせつなものであると説き、第四節にりっぱな人物たるに必要な学問技芸の内容を具体的に示している。

【一】 いでや、この世に生まれては、願はしか

るべきことこそ多かめれ。みかどの御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさならなり、ただ人も、舍人など賜はるきははゆゆしと見ゆ。その子・うまごまでは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、ほどにつけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口をし。

口訳

いやもう、この世に生まれてきたからには、(だれしも)こうありたいと思うはずのことがたくさんあるよ。うだ。(まず家がらのよいということであるが、その中で)天子さまの御位は、(望んではならないものであるから、ここに問題とするのは)まことに恐れ多い。(天子さまご自身に限らず)皇族のご子孫まで、われわれ一般の人間の血統ではないことは、まことに尊いことである。(これもここで問題とすべきことではない。次に人臣としては)最高位の摂政・関白の御ありさま(のすぐれていること)はいうまでもなく、これ以下の普通の貴族でも、朝廷から護衛の供人などをつけていたたく身分の人は、たいしたものだと思われる。そういう人の子や孫の代までは、たとえ落ちぶれてしまっても、やはり品がある。(しかし)それより以下の家がらの者は、その家がらがらにに応じて、運よく出世をし、得意然としている人も、自分ではえらいと思っているのだろうが、(はたから見ると)たいそうつまらない。